

P-222 Stage I 小細胞肺癌に対する手術適応上の問題点

筑波大学附属病院 外科¹⁾, 筑波大学 臨床医学系 外科²⁾
○酒井光昭¹⁾, 石川成美²⁾, 鈴木久史²⁾, 小澤雄一郎²⁾, 佐藤幸夫²⁾, 山本達生²⁾, 鬼塚正孝²⁾, 榎原 謙²⁾

【目的】手術の意義があるとされる stage I 小細胞肺癌治療における手術適応上の問題点を検討する。

【対象と方法】1977年から1995年までに当科で手術が行われた c-stage I の小細胞肺癌(SCLC)は17例(c-stage IA 10例, c-stage IB 7例)で, SCLC 全手術例の56.7%, 肺癌全手術例の2.2%であった。治療は, 初期の症例で行われた手術単独4例, 手術+術後化学療法10例, 手術+術後化学療法+術後放射線療法1例, 術前化学療法+手術1例, 手術+術前術後化学療法1例であった。これらを対象として後向き研究を行い, TNM 臨床診断と病理組織学的診断を比較し, 病期分類別および治療別に5年生存率を比較した。

【結果】5年生存率は52.9%(c-stage IA 70.0%, c-stage IB 28.6%)であった。病理組織学的には p-stage I 77.8%(p-stage IA 85.7%, p-stage IB 50.0%), p-stage IIA 66.7%, p-stage IIB と p-stage IIIA は0%であった。治療別では手術単独50.0%, 手術+術後化学療法63.6%であった。

術前化学療法が行われなかった15例を対象として臨床診断と病理組織学的診断と比較すると, T 診断は pT1 11例, pT2 4例で正診93.3%, 過大評価6.7%, 過小評価0%であったのに対し, N 診断では pN0 8例, pN1 5例, pN2 2例と正診53.3%, 過小評価46.7%であった。

【結論】p-stage I の SCLC に対する手術治療を含めた治療成績は良好であった。しかし c-stage I 症例のうち46.7%が pN1-2 症例であり, 術前に N0 と診断する事に注意が必要であると考えられた。